コンカネンの疑似英雄詩『フットボールの試合』

海　老　澤　　豊

序

18 世紀初頭の英国では,『イーリアス』や『アイネーイス』など古代の叙事詩に見られる戦闘場面をもじった疑似英雄詩が書かれた。アディソンの「ピグミーと鶴の戦い」(1698) や, パーネルの「蛙と鼠の戦い」(1717) がその代表作である。[1] これらの「戦闘詩」はやがて，各種スポーツを題材にした「競技詩」に変化を遂げ，アディソンの「転球場」(1698)、ウィリアム・サマヴィルの『転球場』(1727) と『ホビノル，野外の競技』(1740)，ニコラス・ジェイムズの『レスリング』(1742), ジェイムズ・ラヴの『クリケット』(1744), ポール・ホワイトヘッドの『ジムナジアッド，すなわち拳闘の試合』(1744) などが書かれた。[2] 本稿はマシュー・コンカネン (1701-49) が書いた「競技詩」である『フットボールの試合，すなわちアイルランドの勝者たち。3 巻からなる疑似英雄詩』(1720) を読み解く。[3]

1．マシュー・コンカネン

コンカネンはダブリンで法律を学びながらも，喜劇や詩歌に手を染め, ロンドンに上京して詩歌やエッセイを書き連ねた，いわゆる三文文士のひとりである。ウィリアム・ウォーバートンは 1757 年のリチャード・ハード宛書簡で，かつて交友のあったコンカネンを回顧して，以下のように述べている。[4]

> 彼は法律を学んでいて，とても貧しかった。夕食のための金を彼にくれてやった。しまいには，彼に原稿を渡してやると，彼はそれを書肆に売り，君が考える以上の金を，それが値するよりも多くの金を手に入れた。（中略）すぐ後に，彼はウィリアム・ヤング氏と知り合いになり，ロバート卿（ホイッグの首相ロバート・ウォルポール）のために書いて，ジャマイカの法務長官に任命された。彼は島で裕福な未亡人と結婚し，数年後に英国で富裕なまま死んだ。しかし不埒な気質のために，彼は私の視界に入ってこなかった。したがって我々の交友の記憶は，この時まで沈黙のうちに葬られていた。この男は単に『愚物列伝』に登場する英雄の一人とすべきだろう，その名はコンカネン。

コンカネンはダブリン在住時に書いた「批評家への手紙，現代詩人の擁護」(1722) では「ポープが調べ良き手で弦に触れるだけで，快い調べが森や谷間に響きわたる」(ll. 49-50) と歌い，ポープの詩が「伸びやかであると同時に力強いのだ」(l. 62) と称賛していた。またスウィフトについても「やがてスウィフトが乗り出し，それまで古代人が知らなかった才知の新世界を大胆にも探索した」(ll. 80-1) と讃えていた。[5]

しかしコンカネンがロンドンで売文稼業に精を出すようになってからは，ポープやスウィフトに対する非難が目立つようになった。彼が各種の雑誌に書いたエッセイを集めた『思索家』から引用する。[6] まずは「現代詩について」(1725) と題されたエッセイにおいて，ポープは『髪の毛略奪』では薔薇十字団の説く地水火風の精霊たちを巧みに活用しているが，『ウィンザーの森』におけるパーンとロドナの「学童じみた挿話」ではつまずいてしまった。次に「注釈者について」(1726) では，友人のルイス・ティボルドとポープのシェイクスピア全集を比較して「前者には勤勉さと正確さを見出すことができたが，後者には不注意さと無知を見出すばかりであった」と非難する。さらにポープとスウィフトの共著について

語る「ポープの雑詩編について」では，収められた作品はすでに公刊されたものばかりで，「大衆に対する書肆の欺瞞」とまで言ってのける。またコンカネンは，ポープの『ペリ・ベイソス』（詩歌の沈下法）をからかう『深淵なるものへの補遺』で，ポープとスウィフトの詩句をあげつらった。[7]

その返礼として，ポープは『愚物列伝』(1728) におけるテムズ河の潜水競技の場面で「見よ，コンカネンが水底にまっすぐ潜っていく，冷たく，息の長い，水の申し子だ」(2: 287-8) と歌い，[8] スウィフトも「詩について，狂詩」(1733) で「コンカネンはより大志を抱いた詩人で，延々と深みへ，下方に昇っていく」(ll. 397-8) と腐している。[9] いったい優れた詩人は天を目指して飛翔するものだが，水底に沈んでいくという表現はコンカネンに対する嘲笑と考えてよい。つまりコンカネンは十八世紀前半を代表する二人の詩人によって，永遠にその（汚）名を残すことになったのである。先に述べたウォーバートンがコンカネンと絶縁することになったのも，このような経緯があったためと推測される。ウォーバートンは次第にポープとの交遊を深め，詩人の死後はその文学上の遺言執行者となった。

ロンドンに出た後のコンカネンはポープやスウィフトの仇敵となったわけであるが，ダブリン時代にポープやスウィフトに対する評価が高かったことは「批評家への手紙」の一節からも明らかだ。この詩に先立って書かれた『フットボールの試合』のロンドン版序文でも「高名な首席司祭は著者に格別の称賛を与えてくれた」とあり，これがスウィフトを指すことも確かであろう。

２．18 世紀初頭のフットボール

作品の分析に入る前に，17-18 世紀の英国におけるフットボールの記述をいくつか紹介しておきたい。ピープスは 1665 年 1 月 3 日の日記で，ひどい霜が降りたにもかかわらず，「街路はフットボールであふれている」と記している。[10] 同様にフランス人アンリ・ミソンは『イングランド旅行の追想と観察』(1698) において，街路で行われるフットボールについて記している。[11]

> 冬になると，フットボールは有益で魅力的な運動だ。人の頭ほども大きな革のボールで，中には空気が詰めてある。ボールを得た者が街路の一方から反対側に蹴り込み，技術と言えば，それだけである。

『スペクテイター』第 161 号 (1711) には，祭日に祝日用の服を着て緑地に集まった人々が見物する種々のスポーツが描かれており，棍棒やレスリングの試合とともにフットボールの試合も行われている。[12]

> 緑地の反対側ではフットボールの試合が行われていた。そこではトム・ショートが巧みに振る舞っていたので，大半の人々は「次の徹夜祭まで彼が独身でいることは不可能だ」という意見で一致した。自分でも多くの試合をこなしてきたので，私は少し離れた高台に座を占めた田舎娘に見とれることがなければ，この競技をもっと長く見ていることができたであろう。彼女は何度も奇妙に顔を歪めたり，不思議な具合に全身をひねったり，ねじったりしていたので，私はその意味がとても知りたくなった。私が近づいていくと，彼女はレスラーたちのリングを見下ろしていることが分かった。

ジョン・ゲイは疑似農耕詩『トリヴィア，すなわちロンドン街路歩行術』(1716) において，コヴェント・ガーデンで行われるフットボールの危険について歌っている。[13]

> ここで私はよく進路を変える，見よ，遠くから
> フットボール合戦の猛威が見えてくる。
> 徒弟は店先を飛び出して，その連中に仲間入り，
> 増加する群衆が飛び交う獲物を追いかける。
> 雪の積もった地面でボールを転がしていると，
> 雪を集めた球体は回転する度に大きくなる。
> だがどこへ私は走ろうか。群れは近付いてきて，
> ボールは街路を滑り来ると思えば，高く舞う。
> 機敏なガラス職人が弾んだ球を力強く蹴り返すと，

差掛け屋根の上で窓枠がカタカタと響き渡る。
(2: 347-56)

スイス人セザール・ド・ソシュールも，家族への書簡 (1728) で，英国のフットボールの危険性について以下のように述べている。[14]

通行人にとって厄介な娯楽はフットボールである。この競技では空気を詰めた革のボールが使われ，これを足で蹴るのである。寒い気候になると，大勢の悪漢どもが街路でボールを蹴っている姿が見られ，奴らは窓枠を壊し，馬車の窓を叩き壊し，まったく躊躇うことなく通行人を昏倒させる。それどころか奴らは笑いながら吠える始末だ。

ここで紹介したフットボールの大半は，いずれも街路で見境なくボールを蹴り合うもので，ゴールもルールも存在しなかった。これに対して，コンカネンの描く 6 人制のフットボールの試合は，審判こそ不在のものの，緑地に作られたグラウンド（ピッチ）で，ゴールも両側に配置されており，ロンドンの街中で通行人に危害を加えるような憂さ晴らしとは一線を画している。ヤングは『フットボールの歴史』で，コンカネンの描く試合は「論争の余地なくフットボールであり，現代の試合との関係は密接である」と述べている。[15]

3．試合前

コンカネンがロンドン版の序文で「詩歌における初めての試み」と記した『フットボールの試合』は，ほとんど知られることのないこの詩人の最もよく知られた代表作である。同時代人でコンカネンの略伝を書いたコリー・シバーは次のように記している。[16]

３巻からなる『フットボールの試合』は『髪の毛略奪』を模倣して書かれたと言われている。この作品は軽蔑にはまったく値しない。韻律は全般的に滑らかで，着想はよく検討されており，登場人物は不自然ではない。『髪の毛略奪』が心に浮かばなければ，おそらくもっと称賛を持って読まれたことだろうし，無理やり比較して作品を詮索すると，満足感はすっかり破壊されてしまう。不釣り合いはかなりのものだからである。

かつてボンドはこの詩について，アイロニーの精神が希薄で，あまりに真面目すぎるために，疑似英雄詩として失敗作であると手厳しい評を残した。[17] だがブロイッヒはこの詩を疑似英雄詩の下位区分である「競技詩」(game poem) に分類した。「競技詩」とは『イーリアス』など古典叙事詩の戦闘場面のパロディであると同時に，ヴィーダの『チェスの試合』にも影響を受けたものであり，『髪の毛略奪』におけるオンブル競技の場面もこの区分に含まれるという。[18] さらに近年ではアイルランド詩という観点から見直しがなされている。シャーマーはこれを「ポープの『髪の毛略奪』をモデルとした疑似英雄詩」でありながら「故郷のアイルランドの文化を褒めたたえる」作品と評価する。[19] またフェイガンは「ささやかな喜劇的な傑作」，[20] カーペンターは「完成された，野心にあふれた詩」と一定の評価を与えている。[21] 作品の副題「すなわちアイルランドの勝者たち」は，このような読みが有効であることを示している。

この詩はスウォーズとラスクの間で競われる 6 人制フットボールの試合を描いたもので，コンカネンの自注によれば「スウォーズとラスクはダブリン州の二つの隣接する郡で，その住民たちはこの競技の器用さで最も有名であり，絶えず技術の優位性をめぐって敵対している」という。これを裏書きするように，『スペクテイター』第 432 号 (1712) には以下のような記述がある。[22]

これまで２つの大学を支配してきた敵愾心は消失し，コレッジ間にもほとんどなくなった。だが教区や学校では栄光を望む気持ちが今も存在している。フットボールや闘鶏の季節になると，この小さな社会は互いに相手に対する憎しみを再燃させるのだ。私の田舎の借地人は，敵の教区には正直者など 1 人もいないと思い込まされている。

またコンカネンの自注は，試合が行われる「ダブリンのオクスマンタウン緑地は頻繁にこれらの種のスポーツの情景となる」などと，ダブリン近郊の地理にもたびたび触れている。疑似英雄詩を書こうというコンカネンの意図は，冒頭の２行「これまで歌われたことのない，田園の人々の愉しみと，疑似的な戦争を私は歌う」(1: 1-2) に明確に示されている。同時にコンカネンは，フットボールの試合場を一種の祝祭的な空間と見なし，そこに集ったアイルランド人たちの風習や歓楽を詳しく描き込んでいる。

こちらで騎乗の一団が様変わりした情景に群がり，
ゴールを眺めたり，緑地を早駆けしたりする。
あちらで陽気な村人たちが，よそ行きの服を着て，
試合を待ち望みながら，フィールドを眺める。
先だった歓楽に疲れて，豊満な娘たちが
疲れた手足を草の上に投げ出している。
そこで気楽に横たわり，恋人のもてなしを受け，
新たな征服がなされ，古い誓いが繰り返される。
笑う者，お喋りする者，踊る者，走り回る者，
誰もが試合の開始を待ち望んでいるのだ。
(1: 15-24)

第１巻は試合が始まるまでの賑わいと選手の紹介にあてられる。自注に「フットボールが始まる前に，娘たちがケーキのために踊ったり，他のスポーツに興じたりすることが習慣である」とあるように，競技や踊りに疲れた娘たちは，若者たちと草の上で戯れている。そこで登場した「老ホビノル」(1: 25) は，試合の賞品を以下のように告げる。

６つのオランダ帽子（勝者の正当な賞品だ）が
リボンで束ねられて，目の前でなびいている，
勝利はすばらしく，不滅の栄誉が得られるが，
敗者も満足を味わえないことはなかろう。
６組の手袋が，すばらしい贈り物として，
自分たちの運命と和解させるのに役立つ。
おまけに我らが地主は，勝者の勇気に喝采するため，
泡を立てるビールの樽でもてなすであろう。
(1: 31-8)

続いて両軍の選手が紹介される。スウォーズの選手たちは白い服に身を包み，真赤なリボンをつけた帽子をかぶっている。バグパイプを吹き鳴らす笛吹きに先導されて，先頭を切るのは主人公の羊飼いテレンスで，愛し合うノーラと秘かに目配せをする。続いてダンスで名高いダービーと歌が得意なジョンの兄弟が現われる。二人は足が速く，巧みな組打ちにも長けていた。さらに「強靭にするヒッコリーの実とジャガイモ」(1: 90) を食べて育った，ウィックロー生まれの頑強なヒューが続く。

60 歳にならんとするフェリムは「エンテルスのように」(1: 97) 観客でいることに耐えられず，狡猾な罠をかけるべく試合に参加した。エンテルスは『アイネーイス』第 5 巻に登場する老人だが，拳闘の試合で若いダレースを散々に打ち負かす猛者である。ここでコンカネンは古代叙事詩を引き合いに出すことで，フェリムが古の英雄に劣らぬことを強調している。ちなみにホワイトヘッドも疑似英雄詩『ジムナジアッド』(1744) で，拳闘試合の勝者ブロートンをエンテルスになぞらえている。[23] そして最後を飾るのはダニエルで，彼の慎重な指揮は戦いを破滅から何度も救った。

一方ラスクの選手たちは同様に白い服を着て，空色のリボンを結んだ帽子をかぶっている。先頭を務めるパディは「庭で育った草が彼の選りすぐりの食物」(1: 135) だが，ノーラの愛らしい瞳に思わず胸を焦がす。これが主人公テレンスの恋敵ということになろう。続いてナニー・ウォーターからラスクに住み替えた農夫のキット，貧しい北部（アルスターと推測される）にいる間は「わずかなオート麦」(l. 153) で飢えるばかりであったが，ラスクに来て「強靭にするカブラや太らせるエンドウ豆」(1: 156) を食べて壮健になったニールとケイブ，強靭さと技術を兼ね備えたレナード，不機嫌そうだが頑強な体つきをした粉屋のディックが登場する。

彼らはいずれも職業を持っており，プロのフットボール選手ではない。すでに触れたように，賞品は帽子や手袋（とビール）であり，金銭の授与は想定されていない。彼らにとって試合はあくまでも余暇に楽しむべき娯楽（ただし村の栄誉を担って）にす

ぎないのである。また大半の選手たちは肉体労働を生業としているが，ヒッコリーの実とジャガイモ，カブラにエンドウ豆で体が強靭になったというように，野菜を中心にした食生活を送っている。双方に他の地域から移り住んできた選手がいるが，彼らはダブリン近郊のスウォーズやラスクで以前よりもまともな食事にありついたとされ，アイルランドの貧困さがここかしこに見て取れる。

４．試合開始

両軍の選手がグラウンド（ピッチ）に立つと，ホビノルが試合を始めるべく登場するが，彼は立会人という立場であって，審判を務めるわけではない。使用されるボールは「乾草の塊を丸めて，去勢牛の皮で三重に包み，革の紐でまわりをしっかりと縛ってある」(2: 9-11) という代物である。また自注によれば，「ゴールは短い距離で地面に刺した二本の柳の枝で作られており，先端をより合わせているので，門のように見える」という。ちなみに 1801 年に『イングランド人のスポーツと娯楽』を出版したストラットによれば，ボールは「膨らませた動物の膀胱を革で包んだもの」で，ゴールは「2･3 フィート離して地面に刺した二本の棒」が用いられたという。[24]

ホビノルがボールを空高く放つと，両軍の選手が一斉に殺到する。フェリム（スウォーズ：以下スと表記する）がこれを捕えて，敵の陣地に蹴り込むや，ディック（ラスク：以下ラと表記する）が蹴り返し，ゴールキーパーのダニエル（ス）がゴール前で受け止める。これ以降は現代のアソシエーション・フットボールにはあり得ない（つまりラグビー・フットボールのような）展開が繰り広げられることになる。ダニエルがボールを両腕に抱えたまま，ピッチの中央まで走り出すや，敵軍は全員で彼を取り囲んで引っ張ったり押したりする。ダニエルを助けようと味方も駆けつけ乱闘が始まる。

今やつかみ合って，彼らは互いの技を試み，
腕と腕を締めつけ合い，腿と腿を絡ませる。
転倒させ，絡みつき，激しく跳びかかって，
各々が烈しい敵を地面から持ち上げる。
(2: 37-40)

ラスクを応援する花の女神フローラは，人間には見えない草の輪を作ってダニエルを転ばせ，ボールがこぼれると，両軍がくんずほぐれずの大乱闘になる。この場面はオウィディウスの『変身物語』第 12 巻におけるケンタウルスとラピタイ族の抗争に喩えられる。ラピタイ族の婚礼に招かれたケンタウルスたちが，酒に酔って花嫁に狼藉を仕掛けたことが原因で，両者入り混じっての殺戮が繰り広げられるという話である。

ケンタウルスとラピタイ族は（恐ろしい光景だ）
入り混じり，ひしめき合って無秩序に戦った。
広い荒野で死と混乱が支配し，殺戮した
死体の山であたりを埋め尽くしたごとし。
(2: 67-70)

いくら荒れているとはいえ，フットボール試合の比喩として，ケンタウルスとラピタイ族の殺し合いを持ち出すのはいささか大仰である。『変身物語』は叙事詩ではないが，戦闘場面を描いているという点で，コンカネンは戦闘詩から派生した競技詩たる「フットボールの試合」にふさわしい挿話と考えたのであろう。

だが選手たちの乱闘は止まるところを知らない。テレンス（ス）は元気なニール（ラ）に倒され，キット（ラ）はフェリム（ス）に倒され，ヒュー（ス）はパディ（ラ）に倒された。ダービー（ス）に放り投げられたディック（ラ）はプレーを止められ，ジョン（ス）はケイブ（ラ）に引っ張られたというように，選手たちはボールもお構いなしに相手を叩き潰すことに血道を上げる。その合間に狡猾な（狐を意味する）レナード（ラ）がドリブルでボールを敵陣に運ぶ。これを見たテレンス（ス）は追走してレナードの腕をつかみ，「器用な牧杖」(2: 85) を彼の足に巻きつけて倒す。自注によれば，「選手たちは自分たちが用いる巧みな『足かけ』をこう言う」とあり，テレンスが牧杖を隠し持っていたわけではない。

しかし，またしてもラスクを加護するフローラが，ゼフィルス（西風）を祈りで買収し，エースのパディ（ラ）のキックに力添えをさせる。

響きわたるイチイから放たれた羽のついた矢も
これほどまっすぐ，すばやく飛びはしなかった。
というのも（人の目に見えない）翼を広げて
注意深いゼフィルスは軽いボールを運んだ。
ダニエルは約束された賞品をあきらめつつも
跳び上がり，飛ぶボールを止めようと試みる。
ゼフィルスは彼の猛威を避けて舞い上がり，
ゴールを越えて飛翔するボールを運んだのだ。
(2: 99-104)

微妙で分かりにくい表現だが，ゴールキーパーのダニエル（ス）がボールをキャッチしようとしたために，ゼフィルスに助力されたパディ（ラ）のシュートはゴールを飛び越えて，ゴールラインを割ったのである。コンカネンは自注で「ボールがゴールを通過せずに，ゴール（ライン）を超えた際には常に，両軍はゴールを交換する。これがなされるのは，太陽や風を避けるためである」と説明しており，つまり得点は入らなかったことになる。

5．パーンの挿話

スウォーズを応援する牧神パーンは，フローラが介入したことに激怒して，花や草の面倒だけ見ておればよいのだと女神を難じる。言い返すフローラに対して，パーンはフットボールの起源と自分の傷心について語り出す。これは第 2 巻の後半から第 3 巻の前半まで延々と続く挿話であり，作品と試合の流れを著しく阻害していると言わざるを得ない。この挿話は現代のフットボールで導入されているハーフタイム（試合の前半と後半を区切る休息時間）の役割を果たしていると見なすこともできよう。ただしパーンが語るサリーとの悲恋は，18 世紀の初頭に「競技詩」と並んで流行した「発明詩」に属する挿話であるために，簡単に触れておきたい。

かつてサリーという名の美しい田舎娘が，羊飼いたちの関心を集めていたが，彼女は色恋とはまったく無縁であった。パーンはアポロから教わったフットボールに仲間と興じていた折に，試合を見守っていたサリーの「愛らしい瞳から毒を飲み干した」(3: 14) ために，彼女に求愛するが拒絶される。サリーはパーンから逃げ出し，欲望に燃える神は彼女を追いかける。恐怖に囚われたサリーが，自分を恥辱から救いたまえと神々に祈りを捧げると，彼女はたちまち柳に変身し，それ以来「愛らしいサリー (Sally) から柳 (sally) は名前を付けられた」(3: 58)。パーンは嘆き悲しみ，柳を編んで自分の額を飾る花輪にしたばかりか，「フットボールの緑地に建てられたゴールは，私の花咲く枝（柳）から引き抜かれたのが見えるであろう」(3: 73-4) と語る。

この挿話が『変身物語』に出てくるパーンとシューリンクス（葦）や，アポロとダフネ（月桂樹）の変身譚をもじったものであるとは明らかだ。「発明詩」とは事物の起源を神話的な次元で語るもので，何らかの神の加護によって新たな発明品を得た男が女の愛情を勝ち取るというパターンを持つ。ゲイの『扇』や『トリヴィア』におけるパトン（底上げ靴）を始めとして，女性の装身具が発明された経緯を描く作品が多々ある。[25] コンカネンはゴールが柳で作られていることにちなんで，パーンとサリーの悲恋を描いたわけであるが，一般的な「発明詩」とは異なって彼らの恋は成就しない。

6．試合の決着

両軍は陣地を入れ替えて試合が再開される。テレンス（ス）がドリブルで駆け上がると，パディ（ラ）が疾走してテレンスのベストをつかみ，「牧杖」で相手を転ばせようとする。両軍のエース対決であり，ノーラをめぐる恋敵同士の競り合いである。今度はテレンスが「足を相手の斜め前に突き出し」(3: 124) パディは倒れ伏す。その様子をコンカネンは次のような比喩で描く。

まるで長い歳月の間立っていた背の高い松が，
木々の誇り，森の女王であったが，
しばし打撃に挑み，突き刺さる斧を頓挫させ，

農夫の苦労を軽蔑していたように見えたが，
やがてついに残忍で巧みな一撃で切られ，
倒れて，廃墟を辺り一面に広げるがごとし。
(3: 125-30)

何とも陳腐で大げさな表現である。コンカネンはたびたび試合の描写の合間にこのような比喩を挿入するが，効を奏しているとは言いがたい。ただし，これは 18 世紀初頭の詩には当たり前のようになされる詩法であって，ラスクのエースであるパディを英雄的な存在に高めると同時に，敵対する主人公テレンスの武勇を称賛するという意図があるのだろう。

続いてテレンスはスウォーズの守り神たるパーンに祈りを捧げ，勝利を得られれば，自分の飼っているなかで一番白い仔羊をパーンの祭壇に捧げると誓う。

神は同意し，彼は一蹴りをこっそり盗み取り，
他の者たちとボールをゴールに突き刺した。
ラスクの挑戦者たちはうなだれ，大きな歓声が
上がり，甲高い嬌声が蒼穹を貫いた。
皆の顔に歓びが微笑み，頭をむき出しにして，
帽子が雲のように浮かれる空に飛び交った。
(3: 145-50)

これでスウォーズが 1 点先取したわけであるが，フェイガンによれば「どちらのチームであろうと，先に得点したほうが試合の勝者となる」という規則によって，スウォーズが勝利を収める。[26] 90 分間戦って得点の多いチームが勝利を得るという現代のフットボールとはルールが異なるのである。ちなみに先ほどの引用には，勝利したスウォーズ側の観客たちが帽子を空に投げるという描写があったが，これには次のような比喩が付加される。

まるでカラスの古い巣の上を，空を貫いて，
羽ある種族がひどく混乱して飛び回り，
雷鳴にも似た轟音がまわりの空を破れば，
みなが叫びながら立ち，飛ぶ準備をして，
群れになって舞い上がり，鉛の死を避けて，
昼を真っ暗にして，太陽を遮るがごとし。
(3: 151-6)

歓呼とともに宙を舞う帽子と，銃声にあわてふためいて飛び乱れるカラスに，どのような関連があるというのであろうか。この比喩においてもコンカネンの感覚は納得しがたいものがある。ただし最後の二行については，18 世紀初頭に流行した「狩猟詩」への言及と考えられなくもない。ドライデンが英訳したウェルギリウスの『農耕詩』に倣って，ジョン・フィリップスは『林檎酒』第 2 巻で鳥撃ちの場面を描く。[27]

... 硫黄の臭いが立ち込める死が，
中空を飛びまわる鳥たちを妨げ，彼らは調べ良き
喉を振り絞る間は無頓着で，上昇する重い鉛の弾は
彼らの速さを追い抜く。鳥たちは小さな生命を
雲の上に残し，地面にまっさかさまに墜落する。
(2: 172-6)

宿敵に対する勝利に湧きかえるなかで，スウォーズの選手たちは「見事に競った賞品」(3: 156) つまりはオランダ帽子（とエール）を求める。だが殊勲者のテレンスだけは愛しいノーラのもとへ走って求愛し，説き伏せて同意を得る。

寡婦給与も設定せず，持参金も払わず，
まばゆい宝石が彼女の胸からきらめくことも，
彼女の手で輝くことも，髪で光ることもない。
白いローブも彼女の生来の魅力を飾らず，
豪奢な絹が処女の身を包むこともない。
代わりに技巧もなく甘美で，無垢で晴れやかな，
彼女のきらめく瞳が，明るい光を示した。
(3: 176-82)

ポープは『髪の毛略奪』において，イングランドの有閑階級に属するベリンダの，きらびやかな装飾品や調度品に飾られた化粧室をあでやかに描出したが，コンカネンが提示するアイルランド娘ノーラの

描写はなんとも素朴で貧しいことか。すでに述べたように，フットボールの試合に参加したのは，別に職を持つアマチュアばかりであり，北部で食い詰めて南部に移住してきた選手も見られた。ヤングはこの詩で描かれるフットボールの試合は「欲求不満，退屈，社会的な不正義からの束の間の解放手段」であり，選手たちにエールを振る舞う地主が，アイルランドに地所を持つイングランド人である可能性を示唆している。[28] 最初にしか登場しない気前の良い地主は，何らかの不満を抱えた貧しいアイルランド人たちに憂さ晴らしをさせるために，フットボールの試合を組んだという穿った見方もできるわけである。もっともコンカネンはこの点についてあまり追求せず，冒頭に示した「田園の人々の愉しみと，疑似的な戦争」を描くことに腐心している。

コンカネンの「フットボールの試合」には，古代叙事詩の英雄を思わせる選手たちの果敢な（現代の目から見ると粗暴な）ふるまい，勝敗を左右するパーンとフローラという神々の干渉，大げさな（しかし成功しているとは言いがたい）比喩，そして何よりもフットボールの試合と恋愛におけるテレンスの勝利が織り込まれている。これらは疑似英雄詩としての要件を満たすものであり，この作品が疑似英雄詩の下位区分である「戦闘詩」ないしは「競技詩」に属することは明らかだ。またコンカネンが当時流行していた「発明詩」や「狩猟詩」にも色目を使っていることは，すでに指摘したとおりである。だが「フットボールの試合」という作品は，18 世紀におけるスポーツを題材に取った作品群のひとつとして読まれるべきであろうし，これ以降に書かれる「競技詩」の先駆けとなったことは間違いない。

注

(1) Joseph Addison, “The Battel of the Pygmies and Cranes,” trans. Thomas Newcombe, *Poems on Several Occasions*, (London: E. Curll, 1719) 31-50., Thomas Parnell, “Homer's Batrachomuomachia: or, The Battle of the Frogs and Mice,” *Collected Poems of Thomas Parnell*, eds. Claude Rawson & F. P. Lock (Newark: University of Delaware Press, 1989) 65-108.

(2) Joseph Addison, “The Bowling Green,” trans. Nicholas Amhurst, *Poems on Several Occasions*, (London: E. Curll, 1719) 113-20., William Somervile, “The Bowling Green” *Occasional Poems, Translations, Fables, Tales, &c*. (London: Bernard Lintot, 1727) 67-80., William Somervile, *Hobbinol, or The Rural Games. A Burlesque Poem, in Blank Verse* (London: J. Stagg, 1740), Nicholas James, “Wrestling. A Poem,” *Poems on Several Occasions* (Truro: Andrew Brice, 1742) 21-40., James Love, *Cricket. An Heroic Poem* (London: W. Bickerton, 1742?), Paul Whitehead, *The Gymnasiad, or Boxing Match* (London: M. Cooper, 1744)

(3) Matthew Concanen, *A Match at Football: A Poem. In Three Cantos* (Dublin: Printed for the Author, 1720) ダブリンで予約購読制を取って出版されたが，翌年にロンドン版が出た。テキストの異同はほとんどないが，新たに序文が付されたので，本稿ではロンドン版を選ぶ。Matthew Concanen, *A Match at Football; or the Irish Champions. A Mock-Heroic Poem, in Three Canto's* (London: R. Francklin, 1721) 以下の版にも収録 Poems, upon Several Occasions (Dublin: A. Rhames, 1722), *Miscellaneous Poems Original and Translated, by Several Hands* (London: J. Peele, 1724)

(4) William Warburton, *Letters from a late Eminent Prelate to one of his Friends*, 2nd ed. (London: T. Cadell & W. Davis, 1809) 218-9.

(5) Matthew Concanen, “A Letter to a Critick, In Vindication of the Modern Poets,” *Poems, upon Several Occasions*, 51.

(6) Matthew Concanen, *The Speculatist. A Collection of Letters and Essays* (London: J. Watts, 1730) 40, 188, 260.

(7) Matthew Concanen, *A Supplement to the Profund. Containing Several Examples, very proper to illustrate the Rules laid down in a late Treatise, called The Art of Sinking in Poetry* (London: J. Roberts, 1728)

(8) Alexander Pope, *The Dunciad*, ed. James Sutherland (London: Methuen, 1963) 137.

(9) *The Poems of Jonathan Swift*, ed. Harold Williams, 3

vols (Oxford: Clarendon Press, 1958) 2: 654.

(10) *The Diary of Samuel Pepys*, ed. Henry B. Wheatley, 8 vols (London: G. Bell and Sons, 1920) 4: 303.

(11) Henri Misson, *M. Misson's Memoirs and Observations in his Travels over England*, trans. Mr. Ozell (London: D. Brown et al, 1719) 306-7.

(12) *The Spectator*, ed. Donald F. Bond, 5 vols (Oxford: Clarendon Press, 1965) 2: 2: 132.

(13) John Gay, *Trivia: or, the Art of Walking the Streets of London*, in *Poetry and Prose*, eds. Vinton A. Dearing & Charles E. Beckwith, 2 vols (Oxford: Clarendon Press, 1974) 2: 153.

(14) Cesar de Sussure, *A Foreign View of England in the Reigns of George I. & George II*. trans. Van Muyden (London: John Murray, 1902) 294-5.

(15) Percy M. Young, *A History of British Football* (London: Sportsmans Book Club, 1969) 52.

(16) Colley Cibber, *The Lives of the Poets of Great-Britain and Ireland* (London: R. Griffith, 1753) 29.

(17) Richmond P. Bond, *English Burlesque Poetry 1700-1750* (Cambridge: Harvard University Press, 1932) 303.

(18) Ulrich Broich, *The Eighteenth-Century Mock-Heroic Poem*, trans. David Henry Wilson (1968; Cambridge: Cambridge University Press, 1990) 87.

(19) Gregory A. Schirmer, *Out of What Began: A History of Irish Poetry in English* (Ithaca: Cornell University Press, 1998) 24.

(20) Patrick Fagan, *A Georgian Celebration: Irish Poets of the Eighteenth Century* (Branar: Dublin, 1989) 68.

(21) Andrew Carpenter, ed. *Verse in English from Eighteenth-Century Ireland* (Cork: Cork University Press, 1998)

(22) Spectator, 4: 18.

(23) 拙論「ホワイトヘッドの拳闘詩『ジムナジアッド』」『駿河台大学論叢』第 53 号 (2016) 161-71. を参照。

(24) Joseph Strutt, *Glig Camena Angel Deod, or The Sports and Pastime of the People of England* (London: T. Bensley, 1801) 79.

(25) 拙論「ジョン・ゲイの発明詩『扇』と『トリヴィア』」『駿河台大学論叢』第 55 号 (2017) 157-65. を参照。

(26) Patrick Fagan, "A Football Match at Swords in the Early 18th Century," *Dublin Historical Record* 57 (2004) 225.

(27) *The Poems of John Philips*, ed. M. G. Lloyd Thomas (Oxford: Blackwell, 1927) 73.「狩猟詩」については拙著『田園の詩神　十八世紀英国の農耕詩を読む』の第 1 章と第 2 章で詳説した。

(28) Young, 55.

本論は科研費（基盤研究 C）課題番号 18K00380 の成果物である。